

豊かな仙山生活圏をめざして

- 仙山圏交流研究会レポート -

荘銀総合研究所研究員 齋藤 亜紀

山形市と仙台市は、県庁所在地が隣り合わせという全国的にもまれな地域であり、交通の発達やインフラの整備により、仙山圏は通勤・通学、買い物などの日常的な行動のエリアとなっている。仙山圏交流研究会（以下、研究会）は、平成十三年四月から、仙台都市総合研究機構・河北新報社・荘銀総合研究所の三社がコアメンバーとなり、行政や民間の枠を超えて、仙山圏の交流の現状、今後の交流のあり方や交流・連携促進への課題について検討してきた。研究会の活動を終えるにあたり、これから仙山圏が目指す姿と課題について整理する。

仙台と山形の交流の歴史は古く、延喜時代（九一七年）に編まれた古代法典「延喜式」には、すでに笹谷街道の一部にあたる、小野（現川崎町）から最上（現山形市）への道筋が記されている。江戸時代には、笹谷街道は多くの商人たちが盛んに往来し、山形からは塩や北海道産の塩魚、酒田港に荷揚げされた上方の雑貨や生糸が仙台へと運ばれ、仙台からはマグロやカツオを主とした海産物や竹製品などが山形へと運ばれていた。笹谷街道を往復する人のなかには、このような商人だけでなく、出羽三山への参拝者も多く、幕末には季節によって一日に二百人から三百人が往復したともいわれている。

明治時代に入り、関山峠や二口峠街道などの改修整備がすすめられ、鉄道では昭和十二年に仙山線が全通した。その後、モーターゼーションの発達とともに、高速交通網の整備が一気に進み、昭和五十六年笹谷トンネルの開通、平成三年高速道路関沢ICから山形北ICの開通によって仙台市と山形市が高速道路で結ばれ、さらに平成十三年酒田みなとICが開通したことにより、宮城県側の太平洋から県境を越え、山形県側の日本海までが高速交通ネットワークで結ばれた。

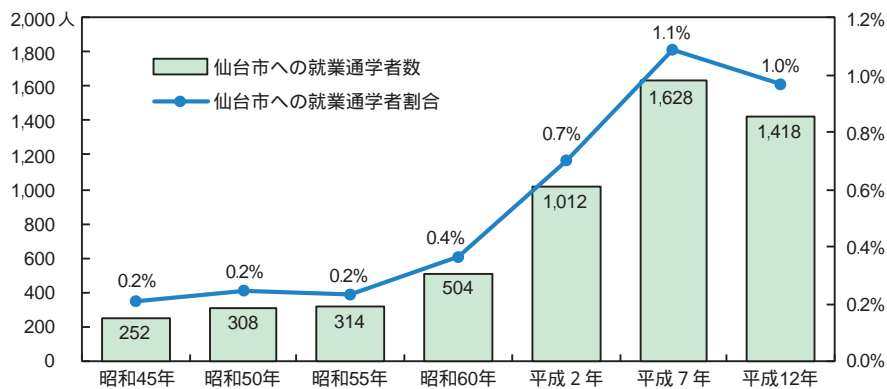
仙山圏交流の現状

交通網の発達とインフラ整備を経て、仙台と山形間は現在、高速道路、国道、鉄道の三つのルートで結ばれ、仙山圏を行き交う人の交通手段には自家用車、高速バス、電車など複数の選択肢がある。国土交通省の旅客貨物地域流動調査によると、平成十二年に宮城県から山形県へ約六百七十万、山形県から宮城県へ約六百六十万の合計約千三百三十万人が行き来した。また通勤通学で仙台と山形を行き来する人は、平成十二年国勢調査によると仙台市から山形市へ千五十四人、山形市から仙台市へ千四百八十八人となっており、これは山形市に常住する通勤通学者全体のおよそ一％が仙台市で通勤通学していることとなる（図1）。

仙山圏の移動の目的は通勤や通学だけでなく、レジャーや観光など、多方面にわたっており、平成十四年に山形県村山総合支庁が仙台市民を対象に実施したアンケートによると、過去一年間に仙台市民の約八〇％が山形を訪れ、その目的は「温泉」が最も多く、次いで「食べ物・飲み物・料理」、「通勤・通学・仕事」であった。

仙台と山形は、高速道路を利用すると車で

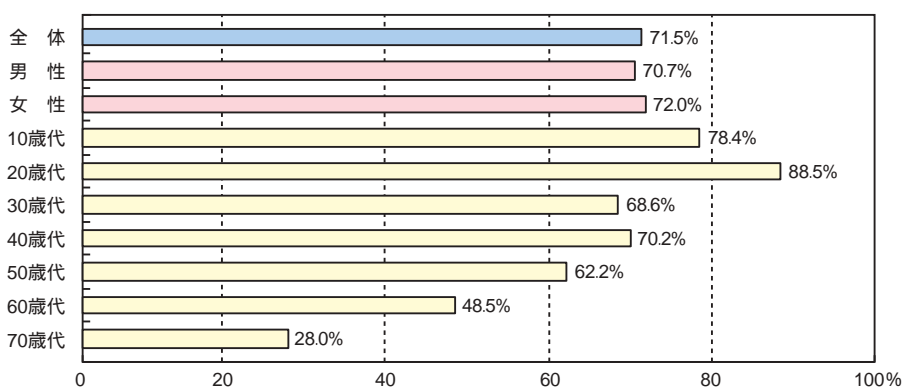
図1 山形市常住者のうち仙台市への就業通学者



資料：国勢調査

約一時間程度の近距離であるが、奥羽山脈を越えると、双方の天候や風景、風土、食べ物などが大きく異なる。週末になると、山形市や近郊のそば屋の駐車場が宮城ナンバーの車であふれ、観光シーズンにはさくらんぼ、ぶどうといった果物狩りを楽しむ人の車で、国道四八号線が車で数珠つなぎになる。仙台の人は、山形の手軽に入浴できる温泉施設、そばや旬の果物のおいしさ、または仙台とは違

図2 山形県民の県外商店街利用者のうち仙台市に行った人の割合(全体・性別・年代別)



資料：山形県の買物動向

う独特な自然や景観などの「山形らしさ」を求めて訪れた人が多かったと見ることができると、過去一年間に山形県民全体では四八・六%、山形市民に限定すると六八・九%が訪れた。仙台を訪れた目的は、「買い物」が最も多く、次に「人に会うため」、「通勤通学」であった(山形県新世紀やまがた課題調査)。

山形県買物動向調査によると、平成十二年

に山形県民のうち、過去一年間に県外で買い物をした人は全体の五〇・八%で、そのうち七一・五%が仙台市の商店街へ買い物に出かけている(図2)。

山形から仙台へ買い物に行く人は、山形市や山形市周辺の市町村からだけでなく、庄内地方といった広範囲からも仙台に出かけており、庄内地域から仙台へ買い物に行く若い女性を「シヨナイガールズ」と呼ぶ言葉まで生まれた。また、平成十二年に仙台市中心商店街の商業者と仙台市が実施したマーケティング調査では、マーケティングの対象となる顧客を仙台在住者だけでなく、山形在住者にも広げて分析されており、このことは仙台市中心商店街における、山形からの買い物客のウェイトの大きさをあらわしている。

山形圏は通勤通学や買い物といった日常生活の圏域となっているだけでなく、日常生活の幅を広げるために行き来していることがわかる。仙台の人は、山形の自然や環境、温泉や食べ物などを求めて山形を訪れ、それに対して山形の人は、仙台の都会的な雰囲気や賑わい、情報などを求めて仙台を訪れている。山形圏に暮らす人々にとって、自分の生活に必要なものだけでなく、生活を豊かにするものを求めて、山形と仙台との間を行き来することはきわめて日常的になっているといえる。

交流が質を高める

山形圏では人の移動だけでなく、物の流通、情報などにおいても盛んに交流されているが、山形圏で新しく交流を作り出すことに

よって、新しい効果を生み出しているケースもある。学都仙台単位互換ネットワーク（以下、単位互換ネットワーク）は、加盟大学の学生が他大学の科目も履修、単位取得できる制度である。これは意欲ある学生に対し、多様な学習機会を提供することを目的として、宮城県内の大学で構成される「仙台学長会議」で提案された。当初、仙台学長会議では仙台圏のみの大学を対象として、単位互換ネットワークを実施する予定であったが、山形の東北芸術工科大学（以下、芸工大）が参加申請をし、平成十三年度に芸工大を含めた加盟大学十七校で開始された。芸工大では、志願者全体に占める宮城県出身者の割合が約二〇%と高いことや、仙台から通学している在学生も六十人以上いることから、仙台からの通学は可能であるとして、県境を越えたネットワークに参加した。

芸工大のように芸術を専門にした単科大学が単位互換ネットワークに参加することは、芸工大の学生のニーズに幅広く対応できるだけでなく、東北地域唯一の芸術デザイン専門学校として、山形のみならず、仙台の文化にも貢献し、また人材を育てていくことが可能になる。この単位互換ネットワークのように、仙台圏の個性ある大学が交流連携を深めていくことは、それぞれの大学や学生間の交流からさまざまな広がりが生みだされるだけでなく、外部からの「眼」によって互いに刺激され、それぞれの個性をさらに磨き、質を高めるきっかけにもなっている。

国土交通省の全国総合開発計画「二十一世紀の国土のランドデザイン」（平成十年）では、「参加と連携」が新しい地域づくりの理念

とされている。また、地方分権の進展によって、地域づくりは個別市町村が自己完結的に進めるのではなく、お互いに交流・連携しあつて進めていくという必要から、日本の各地域ではさまざまな地域交流や連携の取り組みが行われている。

問題意識を共有

研究会は平成十四年十一月に、県境を越えた連携に取り組んでいる、山口県下関市と福岡県北九州市を視察した。関門海峡を挟んで向かい合っている両市は、共通の資源である関門海峡の景観保全と整備を目的とした全国



関門海峡

でも珍しい同一名称・同一内容の「関門景観条例」を平成十三年に制定した。また両市は、関門エリアの観光振興においても一体となった取り組みを進めており、共同パンフレット作成や観光PR活動などをおこなっている。さらに両市の首長のあいだで、「関門エリアでは、互いに同じような施設はつくらない」という共通認識を持ち、北九州市側には海の博物館、下関市側には水族館と互いに役割分担している。

両市を訪問した際に、この連携に取り組んできた両市の担当者がともに、「同じ問題意識を持ち、取り組むべき具体的な課題があれば、同じ県でなくても協力しあうことは、ごく自然なこと」と述べていたのが印象的であった。

生活圏としての仙山圏

研究会は、人口、交通、観光、商業、教育、文化・歴史などのテーマごとに仙山圏交流に関するデータの分析、仙山圏の交流に携わっている方々によるレクチャー、交流連携先進地への視察、また市民参加によるトークセッションなどを通して、仙山圏交流の現状と、交流促進のための課題などについて議論を重ね、仙山圏がこれから目指していくべき、新しい交流連携のあり方を探ってきた。

仙山圏は、県庁所在地間の移動時間が約一時間と近距離であること、バス、電車、車など複数の交通機関を使って移動できること、また仙台と山形がそれぞれ異なる個性的な資源や文化を持っているという、交流が促進されるための好条件が揃っており、この恵まれた環境を生かすために、今後仙山圏では具体

的な交流促進にむけた取り組みが必要である。

そのうえで仙山圏が目指す新しい交流の姿は、これまで行政が中心となって進められてきた県や市といった行政単位での、地域と地域の交流ではなく、山形と仙台は一つの生活エリア「仙山生活圏」として、仙山圏に暮らす人々がより豊かで広がりのある生活を実現するために、生活者が主体となった交流である。

峠を越える

一つの仙山生活圏を目指していくために越えなければならない課題としてはまず、道路や鉄道といった移動手段や交通インフラがこれまで以上に整備され、サービスが向上することによって、さらに利用しやすいものにしていくことが必要である。また今後は、天気予報やニュースなど身近な情報や、自分の欲しい情報がいつでも得られる情報提供の整備も必須だろう。さらに、仙台と山形のお互いの地へ足を運び、関心をもつきっかけとなるような、イベントの開催や交流の仕掛けも必要になってくる。

しかし、仙山生活圏の実現のために最も必要なことは、仙山圏を一つの生活圏として一緒にあって課題や問題意識に取り組む事が出来る、話し合える、また向き合える「関係」ではないだろうか。これまでの仙台と山形はとかく、「取る」「側の仙台と」「取られる」「側の山形」という構図で語られることが多かった。しかし、これだけ多くの人が、行政の枠を意識せず仙山圏を歩き来しているなかで、

仙台と山形は「取り取られる」「関係で互いに背を向けるのではなく、これからはお互いに「向き合い、知り合い、互いに足りない部分を補い合う」「関係になることが必要である。この関係を積み重ねることによって、お互いをベストパートナーとして認め合うことができる。仙山圏に求められているのはまさにそのような、他の地域がうらやましがら「隣人関係」であり、仙山圏はこのような圏域になったときに、はじめて仙台山形を遮るすべての「峠」を越えたことになる。

真の仙山生活圏へむけて

平成十四年二月に、研究会の中間報告として「第一回仙山圏交流フォーラム」ツインシティ生活圏を目指して」が開催され、山形・仙台市長が壇上でメッセージを交換しあった。両市長のメッセージは、「山形の癒しの風土・文化、仙台の刺激の風土・文化がお互いに補完し合い、また個性を大事にしながら協力し合って、地域的な一体感をつくっていく」と、また「日常生活や教育などのさまざまな分野でつながりのある山形・仙台両市の交流・連携を市民レベルで深めることは今後ますます重要になるだろう」と、両市長の仙山圏交流に寄せる高い期待をうかがえるものであった。

研究会では二年間の活動を締めくくるにあたり、ことし五月に仙台市で「仙山圏交流フォーラムツインシティ生活圏」明日への飛躍」の開催を予定している。そこでは仙山圏が「より多様で豊かな生活圏を実現できる地域」とするための道しるべやアイデアな

どが提案されるであろう。「仙山生活圏」創造への挑戦は、仙山圏に暮らす人々のさまざまな交流実績の積み重ねによって、質の高い、より確かなものを目指してスタートしたばかりである。



第1回仙山圏交流フォーラム
(平成14年2月山形市)



握手を交わす山形・仙台両市長